銀の勇者と金の王

柚木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀の勇者と金の王

【Ｎコード】
Ｎ２７６４ＢＡ

【作者名】
柚木

【あらすじ】
勇者として召喚されたが女だからというだけで命を狙われているらしい。
協力者の力を借りながらお隣の国に亡命を目指しての逃亡生活。
神様の加護で使えるようになった魔法で男の姿になってカモフラージュもばっちり・・・？

文章の練習用に書いてます。読みづらい部分が多いかと思います。
更新頻度もその時の気分に左右されがちです。

それでも生暖かい気持ちでお付き合いくださると嬉しいです。

はじまり

気がついた時にまず目に入ったのは見慣れない天井だった。
少し痺れが残る頭を振り、意識を覚醒させ現状を確認する。

少し体に痺れはあるが動けないほどではない。
服装は記憶にある通りの喪服代わりの制服。

「確か・・・お墓参りに行って・・・・・」

そう、私はお墓参りをしていたはずだった。

＋－＋－＋－

祖母が捜索願を出し、自身も必死で兄の行方を探していた。
しかし兄は見つからなかった。
行方不明になる直前の足取りさえもわからなかった。
もちろん私も探したが、やはり兄は見つからなかった。

それから色々とあった。
嬉しいことも、悲しいことも。
それらを全部、祖母と差さえあって生きてきた。

兄がいなくなって七年。
兄の失踪宣言が成立して正式に兄の死亡が認められた。

本当は生きていて欲しい。
でも今のままじゃ前に進めない。

兄を見つけることは諦めていないけれど、それをひとつの区切りとして受け入れた。
「これから新しいスタートだね」と言うと、祖母も少し悲しそうに微笑んだ。
その日の夜、静かに祖母は泣いていた。

それから数日後、祖母が倒れた。
今までずいぶん無理をしてきた祖母。その無理がたたったのだろう。
あっという間に祖母は両親の元へと旅立ってしまった。

「翡翠のこと諦めないでね」

最後にそうやさしく微笑んで。
祖母が旅立ってからはとにかく泣いて、泣きはらして、やっと落ち着いた頃にお墓参りに行く決心をした。

小高い海に面した丘にお墓はある。
季節は春。日差しが心地よい日だった。

きれいにお墓の手入れをして、ふぅと空を仰ぐ。
春とはいえお墓の手入れは重労働で、うっすらと汗が滲んでいた。

ざあぁっ

心地よい風が吹き抜けた。
海に面したこの場所は風の通り道になっている。
風がない穏やかな日でだったけれど、この場所は例外なのだ。

ふと違和感を感じて視線をあげると、太陽がその輝きを増したように見えた。
そして次の瞬間、ありえない突風に襲われた。

地面から足が離れる浮遊感。

白く霞む視界。

ずきずきと激しく頭が痛む。

わけがわからなくて、痛みで思考も麻痺してきて。

ふと人の声が聞こえた気がしたけれど、その言葉を理解することもできなかった。
理解しようという気すら起こらないほど思考は麻痺していた。

召喚された少女

そして今のこの状況に至る。

周りを見回してみても見覚えがない場所だ。
それどころかなんだか高そうなアンティーク調の家具が並んでいた。

あの突風に飛ばされて気を失ったところを通りかかった裕福な人にでも助けられたといったところだろうか。
落ち着かないし早めに家主にお礼をいって失礼しようかと思案していると、コンコンと控えめなノックの音がした。

「お目覚めですか？」

「あ、はいっ」

「では少々失礼してもよろしいですか？」

「もちろんですっ」

とっさのことで思わず声が上ずったがそれが仕方のないぐらいの美声だ。
慌てて佇まいを正して声の主が入ってくるのを待つ。

「ご気分はいかがですか？」

ゆっくりと静かに部屋に入ってきたのは、流れるような蒼の髪が印象的な青年だった。
しかしいわゆる美形と呼ばれる人種である青年は、白いローブとい

う奇妙な服装だ。
そもそも髪が蒼という時点で奇妙すぎる。
いくら日本人の顔のつくりとはかけ離れた外人さんだからといって天然で蒼い髪というのは聞いたことがない。
これはちょっとオタクな友人が言っていたコスプレ趣味の残念な美形というやつだろうか。
それはさておき、助けてくれたことに間違いはないだろう。

「えっと、ちょっと痺れたような感覚はありますが大丈夫です。助けていただいてありがとうございます」

私がそう言うと、彼は髪と同じ蒼の瞳を細めて微笑んだ。
すべてを見透かされているような気分にさせる、そんな瞳だった。

「少しだけ失礼しますね」

彼はそう言って私の右手をとる。
かぁっと顔に熱が集まるのがわかった。
しかしそれも次の瞬間消えてなくなったのだが。

私の手に重ねた彼の手を中心に、淡い光が溢れた。
私はその光景をただ呆然と眺めるしかできなかった。

「いかがですか？」

そう言って彼が手を離して、やっと正気に引き戻された。
彼の言葉の意味が分からずに首を傾げれば、さっきまで動かすたびに感じた痺れが消えていた。

「・・・痺れが消えました」

「それはよかった」

「ありがとうございます」

未知の出来事に驚きを隠せずに、それでも不思議と怖いと感じることはなくお礼を伝える。
そして少しずつ、感じる違和感が大きくなっていく。

手から光が生まれて体の痺れが消える。
そんな治療方法を私は知らない。

チラチラと頭を過ぎるのは少々オタクな友人と付き合いで一緒にプレイしたゲーム。
剣や魔法が出てくるファンタジーものだ。

つぅと背中を冷たいものが伝う。

目の前の青年も残念な格好の美形な外人さんなどではなく、これが普通なのだとしたら？
残念なのは私の頭のほうではないだろうか。

「申し訳ありません。すべてはこちらが悪いのです」

そう言って青年は膝をつき、頭をさげた。
何だか嫌な予感しかしない。
ぎゅ、と手に力を入れて私は彼の言葉を待つ。

「すでにお気づきかもしれませんが、ここは貴方のいらした世界ではありません。いわゆる異世界という場所にあるアルメイサンとい

う名の国です」

膝をつき、頭を下げたままの彼が苦しそうに告げる。
表情は見えないが、その言葉に嘘は感じられない。

「・・・・・」

そんなことすぐに信じられるわけもない。
でもそれが彼の狂言だと断言できないのも事実。

「あの、さっきの光は・・・」

「あれはリヒトの加護による治癒魔法です」

「魔法ですか・・・私のいた場所には魔法なんてありませんでした」

魔法なんて、私の暮らしていた世界にはなかった。
でも現にその魔法を目の当たりにして、その効果も実感してしまった。
あれは手の込んだ手品でこれがドッキリだといえないこともないが、そもそも私にこんな大掛かりなドッキリを仕掛けて誰にメリットがあるというのか。

「そうですか・・・この世界でも魔法が使える人間は少数です。それについては後ほどご説明しましょう」

「はい」

「それでは遅くなりましたが・・・。私はこの国の神官長を務めているアルファルドと申します。アルとお呼びください」

「私は葉山瑠璃といいます。瑠璃、が名前です。よろしくお願いします、アルさん」

慌てて名乗り、ベッドに座ったままだったがペコリと頭を下げる。
するとアルさんは少し困ったように笑う。

「私のことはアル、と。貴方は勇者様なのですから」

「は・・・？」

ユウシャ・・・？
今アルさんは勇者と言った気がしたがきっと聞き間違いだろう。
私が勇者だなんてありえない。

ちょっとオタクの友人に見せてもらった本にこんな設定の話のものがあったが、それはすべて作り物であり娯楽用。
実際に自分がその立場にならないから楽しめるのだ。
それでもあの友人なら自分の身に降りかかったとしても、小躍りして喜んだりするのだろうか。

理不尽な理由

「何かの間違いでは？」

「貴方が勇者であることは間違いありません。我々が信仰するリヒトによってこの世界に召喚されたのですから」

一応間違いがないか確認してみがやはりきっぱりと否定されてしまった。

ゆるりと首を振って否定するアルさんの顔は、とても悲しそうだった。

あぁ彼は本当のことを言っている、まだ彼のことを完全に信用したわけではないのにそう確信する。

何故だかわからないけど、すべてが嘘偽りのない本当のことなんだと。

「しかし、貴方はリヒトだけでなくモンドの加護も厚いようです」

「あの、そのリヒトとモンドというのは？」

「説明不足で申し訳ありません。リヒトは我々の信仰する光の神であり、モンドはリヒトの眷属にあたる月の神です。その髪の色がモンドの加護を受けている証でもあります」

「髪の色、ですか？」

言われてそれなりに長く伸ばしている髪を人房つまむ。

「え・・・・何コレ・・・」

一度も染めたことのない私の黒髪は、見事な銀髪になっていた。
引っ張ってみても抜けることはなく髪を引っ張られた痛みもあり、
やはり自分の髪に間違いはない。

「私の髪は黒でこんな色じゃ・・・」

「黒、ですか?確信はありませんが、恐らくこの世界に召喚された
際にモンドの加護を厚く受けて変化したのだと思います」

ただただ呆然とするしかできなかった。
そしてアルさんがそんな私にトドメをさすような一言を告げる。

「貴方は勇者様で神に遣わされた尊いお方です。しかしアルメイサ
ン王は貴方を亡き者にしようとしています」

「な、ぜ・・・ですか?」

「貴方が女性だからです」

意味がわからない。
突然勇者で神に召喚されてこの世界にきただとか、神様の加護とや
らで髪が銀髪になったとか。
おまけに尊い存在だというのに王様に命を狙われている?
しかもそれが私が女だからという理由だけで。

突拍子もないことで、言葉も出ない。

「過去の勇者様が男だったというだけで女性の勇者はありあえない
と短絡的とらえるような愚かな王なのです」

青の瞳は悲しそうに伏せられて、「申し訳ありません」と呟く彼になんと言えばいいのかわからなかった。

好きでここにいるわけではないのに。

望んで勇者といわれる存在になったわけではないのに。

まだ兄を見つけられていないのに。

それはあまりにも理不尽で悔しくて、そして恐ろしくて。

ぽたりと涙がこぼれた。

「私は貴方をあの愚王の好きにさせるつもりはありません。しかし今の私にあの愚王を止めることができないのも事実です」

そう言ったアルさんの声は先ほどまでの穏やかな声とは違う、意思の強そうなものだった。

「ちょうど今日は満月でモンドの加護の強い日でもあります。ここから逃げるには都合のよい日です」

「逃げる・・・？」

その言葉に顔を上げれば、アルさんはくっと口角を上げて手を差し出す。

「貴方は私にとってもこの国にとっても大切な方。時期が来るまであの愚王の手の届かない隣国に身を隠したほうが安全でしょう」

その言葉にどきりとした。

信仰するリヒトに召喚された勇者だからということなのだろうが、『私にとって大切な人』といわれれば誰だってどきりとするんじゃないだろうか。

ましてやアルさんは私には免疫のない美形なのだ。

それをごまかすように慌てて言葉を返す。

「隣国、ですか？」

「はい、アルメイサンの隣にはモンドの信仰が盛んなアルデバランという国があります。以前は荒れていましたが今はとても治安もよく、モンドの加護の厚い貴方が身を寄せるには最適の国でしょう」

時期というのがいつなのか、どういう状態の時なのかは分からない。でも私にこの国の知識など全くなく、生活する術もない。

結局アルさんの言葉に従う以外に道などないのだけれど。

ふぅ、とため息が零れる。

「モンド・・・月の神様なんですよね」

ゆっくりとベッドから降りて立ち上がり、月の光の差し込む窓辺に立つ。

窓から見上げた月はもといた世界と同じようで、でも比べ物にならないほど美しと思った。

「っつ！」

違和感を感じて息が詰まる。
頭に凄まじい勢いで何かが流れていく。

「ルリ様！？」

そんな私をみてアルさんが慌ててこちらに駆け寄る。
違和感はすぐに消え、私はアルさんに振り返ってにっこりと笑う。

「大丈夫です。ただ月の女神様が、少し魔法の使い方を教えてくれたみたいです」

「モンドが・・・？」

「はい、たとえばこんな風に」

先ほど一気に頭に流れ込んできた知識。
それを思い浮かべながらすっと右手を自分に翳す。

光に包まれ、そして体が変化する違和感。

「ルリさ・・・ま・・・？」

アルさんが驚きを隠さずに、私をみて呆然としたように名前を呼ぶ。
私はそんなアルさんの反応をみて頷く。
辺りに鏡もなく窓は磨りガラスで自分の姿を確認できていないが、
ちゃんと魔法は使え、成功したらしい。

少しだけ高くなった目線に違和感を感じるけれど、ヒールを履いていると思えばその程度でしかない。
体には多少違和感を感じるけれどそれもじきに慣れるだろう。

「どうです？これなら見つからないと思いませんか？」

にっこりと笑ってそういう私は、完全に男の姿になっていた。

ちなみに服装は制服のままだったが、女子の制服ではなく男子の制服へと変化していた。
さすがにスカートだと変態っぽいのでそれはよかったと思う。
でも男子の制服ということは服装は私のイメージから変化したということだろう。
どうやらこの魔法は使用者のイメージに強く影響を受けることに間違いないようで、頭に浮かんだ魔法の知識は間違っていないようだ。

旅の同行者

「魔法なんて空想の世界のものだとばかり思ってました」

「貴方はリヒトとモンドの加護を受けるお方ですから魔法は使えるだろうとは思っていましたが・・・まさかそんな・・・」

「男になるなんて？」

アルさんの言葉に自嘲の笑みがこぼれる。
幼いころ魔法が使えたらどんなにすばらしいだろうと憧れたこともある。
正義のヒーローみたいに悪者をやっつけたり、シンデレラのように魔法でお姫様に変身するとか。

まさか本当に自分に魔法が仕えるようになって、最初に使う魔法が『男になる魔法』だとは思いもしなかったけれど。

「女神様はかなり私に過保護なようです」

「確かに、モンドは月の女神だといわれていますが・・・まだそれはお伝えしていないのに何故それを？」

「今月の光を浴びたときに、一気に魔法の知識が頭に流れ込んできました。そして綺麗な女の人の姿も」

一度流れ込んできた知識は到底すぐ覚えられるようなものではなかったのだが、使いたい魔法を思えばその魔法が頭に浮かぶという感じでチート感満載だ。

ただそれはモンドに関する魔法のみで、残念ながらリヒトに関する魔法の知識は皆無らしい。
命がかかっているというのになんとも中途半端なチートだが。

私の言葉を聴いてアルさんは目を伏せ、静かに息をつく。
そして視線を私に戻したアルさんの目には強い意志の色がみえた。
魔法で男の姿になってるとはいえ中身は元の女子高生なままな私が盛大にときめいてしまっても仕方のないことだろう。
アルさんは周りの友人たちが騒いでいたアイドルが比べ物にならないほどの美形で、その意思の強そうな瞳で見つめられているのだから。

「その姿は身を隠すには都合がよいですね。とても可愛らしかったので少々残念な気もしますが」

「へっ？」

アルさんの言葉に顔に熱が集まるのが分かる。
きっと彼は特別な意味で言ったのではないだろうが、こちらは美形にもそんな言葉にも免疫がないのだ。
真っ赤になっているであろう私をみて、再び先ほどまでと同じ優しい笑みを浮かべるアルさん。
今私は男になっているのだからちょっと引かれているんじゃないかと心配にもなる。

その時コンコンと扉がノックされ、アルさんがちらりと扉を一瞥してからこちらに向き直った。

「こちらの世界に来たばかりの貴方を一人で送り出すわけにもいかないので、貴方の意見も聞かずこちらで勝手に同行者を決めてしま

いました」

「あ、いえ。そのほうがありがたいです」

「シャムス、入ってください」

アルさんが再び扉を振り返り声をかけると、「失礼します」と控えめな声が聞こえて一人の青年が部屋へと入ってきた。

「彼はシャムス。貴方の護衛を兼ねた同行者です」

「シャムスと申します。どうぞよろしくお願い致します、勇者様」

シャムスと名乗った青年は、アルさんとは別のタイプの美形だった。柔らかそうな金の髪にすこしきつめの紫の瞳。

アルさんが綺麗といわれるタイプの美形ならシャムスさんは格好良いといわれるタイプの美形だ。

こんな美形と一緒に過ごすのは落ち着かなくて、心臓に悪そうな気すらする。

まぁ今の自分は男なのだから毎回赤くなったりしていたらさぞ気持ち悪がられるだろうが。

「シャムス、こちらはル「ラピスです。よろしくお願いします」・・・は？」

アルさんの声を遮って名乗る。

思いっきり偽名だが、（そんなに良くはない頭でだが）ちゃんと考えてのことだ。

「私のもとの世界の名前では目立ちそうなので・・・この名前のほ

うが違和感が少ないかと思ったのですが」

「確かに・・・そちらの名前の響きのほうがこちらの世界の名前には近いですが・・・」

「隠れるには少しでも目立つ要素を減らしたいのです。この髪だけでかなり目立つきもしますけどね」

髪を指にくるりと巻きつけ、男の姿になり髪が短くなっていることに気づき苦笑がもれる。
髪も私のイメージに添うように短く変化したらしい。
そんな私たちのやり取りを、シャムスさんはただ静かに眺めていた。

よく友人に「瑠璃の話し方は女の子っぽくないよね」と言われていたのだが、それがこんなふうに役にたつ時がくるなんて人生何があるかわからない。
一緒に暮らしていたのが祖母だったからか、口調は大人びているとよく言われたし周りの大人の顔色を伺うことも多かった為に周りの子達と口調が違うのは自覚している。
友人が私の口調を矯正しようとした事があったが、「ごめん私が悪かった」と何故か誤られた。

「アル、神殿の外に人の気配がある。急いだほうがいい」

ふとシャムスさんが顔を窓の外へ向けてそう告げた。
びくり、と体が震える。

「ラピス様、思っていた以上に時間がないようです。シャムス、ラピス様を頼みます」

「ああ、わかっている。ラピス様、こちらへ」

「はい、シャムスさん」

シャムスさんに促され、アルさんに背中を押される形で部屋をでる。
出た所でシャムスさんが振り返る。

「今後は旅の連れということで、お互いに敬語などは一切なしでお願い致します。申し訳ありませんが、銀髪はこの国では目立ちますので」

「わかりました・・・いや、わかった」

シャムス、の言葉に頷く。
そんな私を見てシャムスはふっと微笑む。

「私は正面にいるお客様のお出迎えに行かなくてはいけませんのでここでお別れですね」

「アルさ・・・いやアル、ありがとう」

「・・ラピス、俺達は別の場所から出るぞ」

私の言葉にアルはふわりと微笑んで、すっと背筋を伸ばして歩き出す。
その背中を見送り、シャムスに連れられアルとは反対方向にある別の小さな部屋へ入った。

部屋に明かりはなく、しかし部屋の中心にある台座に置かれた水晶のような石がかすかな光を放っていた。

それはとても幻想的な光で思わず見とれてしまう。

「アルが用意した転移用の宝珠だ。急ごう」

シャムスに手を引かれ台座の前に移動する。
男になって手も多少大きくなっていたが、シャムスの手はそれより大きくて逞しかった。
繋がれている手とは反対の自分の手をみる。
男になったとはいってもこんな手で身が守れるんだろうかと不安になった。

「いくぞ」

その声に慌てて顔を向ければ、シャムスが宝珠に触れすっと目を細めた。

何か暖かいものが緩やかに流れてシャムスの手に集まっていく感覚。
これはシャムスの魔力の流れなんだと判る。
その魔力に反応して宝珠の輝きが増し、そして部屋に光が溢れた。

＋－＋－＋－

シャムスが辺りを警戒しつつ歩き出す。
遅れないように少し急いで足を踏み出した。

「う・・・気持ち悪・・・」

突如ぐらりと視界が歪み、体が傾くのがわかったがどうすることもできない。
しかしすぐにシャムスが支えてくれたので、地面と抱き合うようなことにはならずにすんだ。
シャムスがじっとこちらを覗き込むのを気配で感じる。

「魔力酔いだな」

魔力酔い？なにそれ・・・と聞きたいが話すのも辛い。

「魔力に触れたことがない者や耐性のない者などがなるんだが・・・そうか、お前魔力は高いが異世界の人間だったな。魔力に触れたことがなかったのなら仕方がない。じきに治まるからそれまで辛抱してくれ」

そう言ってシャムスは少しだけ身を屈めて、私を担ぎ上げた。
それはいわゆる『俵担ぎ』だった。
いや、決してお姫様抱っこして欲しかったわけではないのだけれど。
ただ、この担がれ方は・・・胃が圧迫されて余計に気持ちが悪い。

「っつ、悪い」

相当顔色が悪かったのか、すぐに気づいてもらえて背中に負ぶってもらう形となった。

さすがに見た目だけとはいえ男同士なのでお姫様抱っこは回避されたようだ。

結局近くにあるという街までずっとシャムスに負ぶって連れて行ってもらった。

最初から文字通りおんぶに抱っこで申し訳なさすぎる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2764ba/

銀の勇者と金の王

2012年1月8日00時48分発行